



TITLE:

古ジャワ文学におけるスタソーマ 物語の受容と変容

AUTHOR(S):

青山, 亨

CITATION:

青山, 亨. 古ジャワ文学におけるスタソーマ物語の受容と変容. 東南アジア研究 1986, 24(1): 3-17

ISSUE DATE:

1986-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/56236>

RIGHT:

古ジャワ文学におけるスタソーマ物語の受容と変容

青 山 亨*

The Adoption and Structural Transformation in Old Javanese Literature of *Sutasoma*, an Indian Buddhist Story

Toru AOYAMA*

The process of Javanization of Indian culture is strikingly illustrated by the transformation of *Sutasoma*, a Buddhist story about an incarnation of the Buddha who converted a cannibal, which is preserved in two Old Javanese texts and more than 20 Indian texts and Chinese translations. By comparing the structure and contents of the story found in one of the Old Javanese texts, written by the fourteenth-century poet Mpu Tantular, with the Indian and Chinese texts, it seems clear that what is seen as the *Sutasoma* story in the former could originate solely from the Pāli *Sutasoma jāṭaka* (No. 537), though the author utilized elements from other sources as well. Some

significant changes in the second Old Javanese text (included as an abridged version in *Canṭakaparwa*, which is believed to have been compiled in the fifteenth or sixteenth century), such as the dismantling of the intricate story-within-a-story structure into a chronological sequence of episodes, the replacement of the original theological teachings by down-to-earth preachings, and the employment of the Middle Javanese usage of personal pronouns, are suggested to be the result of an attempt to adapt the story for the *wayang*, though to what extent the text would actually have been used for this purpose requires further investigation.

はじめに

ここでとりあげる古ジャワ文学というのは、空間的にはジャワ東部を創作活動の主な中心とし、時間的には10世紀中ごろから15世紀初頭にかけて、言語的にはオーストロネシア語族に属する古ジャワ語（カウィ語）によって書かれた、そして何よりも、サンスクリットを媒介としてインド文化の大きな影響を受けて成立したヒンドゥー・ジャワ文化から生まれたさまざまな文献の総称である。

ジャワ文化の中核ともいうべきヒンドゥー・ジャワ文化は、外来のインド文化という他律的な契機と、ジャワ固有の文化という自律的な契機からなりたち、発展してきた。それだけに複雑な様相を呈するその全貌をとらえることは、けっして容易なことではない。そのためにはさまざまな分野での研究の積重ねが必要とされる。しかし、そのなかでもとりわけて、ヒンドゥー・ジャワ精神の直接的言語表現である古ジャワ文学の多面的な研究が重要視されねばならぬことは言をまたないであろう。

本稿では、この古ジャワ文学理解の橋頭堡として、インドから伝えられつつも独自の変

* Department of Indonesian and Malayan Studies, University of Sydney, N. S. W. 2006, Australia

化を遂げたスタソーマ (Sutasoma) 物語を材料としてとりあげ、思想・宗教的側面ではなく、主に物語の構造の変化に着目して、この物語がインドから受け入れられる過程、ジャワ内部であらたな変貌を遂げていく過程を分析する。

I スタソーマ物語の性格

スタソーマという主人公が人食い王を調伏するという物語は、インドだけでも20点をこす仏教文献によって伝承されているが、本稿ではそのうち11点の文献をとりあげ、ジャワの2点とあわせてスタソーマ物語と総称することにする。¹⁾ 個々のスタソーマ物語は、人食いの調伏という基本的テーマでこそ一致しているが、量的にも内容的にも差異がみられる。インド側テキスト11点について、ひとつひとつ具体的な内容を紹介することは、本稿の目的ではなく避けておくが、それらの物語構造に関しては第3章で分析がなされる。

一方、古ジャワ語のスタソーマ物語を伝えるテキストには2点ある。ひとつは、14世紀後半にマジャパイト朝 (Majapahit) の宮廷詩人タントゥラル (Mpu Tantular) が書いたカカウィン (kakawin, 韻律詩) の「スタソーマ」(Sutasoma, *Sut. K* と略す) であり、もうひとつは、それからおよそ1世紀ないし1世紀半遅れてまとめられた物語集、チ

ヤンタカパルワ (*Cantakaparwa*) に収められている散文のスタソーマ物語 (*Sut. Cp* と略す) である。*Sut. Cp* はあとで詳しく述べるように、*Sut. K* の内容をほぼ忠実に簡約化したもので、*Sut. K* のダイジェスト版といってさしつかえない。その内容は、プルシャード・シャーンタ (*Puruṣa-da-śānta*, 調伏された人食い) という *Sut. K* の別名が示すように、²⁾ インド伝承のスタソーマ物語からテーマを引きつぎ、スタソーマ物語と呼ぶにふさわしいが、具体的な筋やモチーフに関しては大きな相違がみられる。物語の内容については、第2章で *Sut. K* の概要を紹介する。古ジャワ語スタソーマ物語の形式面については、次に章をあらためて古ジャワ文学史の流れのなかで述べることにする。

現存する最古の古ジャワ語史料は804年の日付をもつ碑文である。³⁾ しかし、ボロブドゥールやプランバナンに代表される壮麗なチャンディ遺跡とは対照的に、ヒンドゥー・ジャワ文化が中部ジャワ期 (7世紀中ごろから10世紀はじめまで) に生み出したであろう古ジャワ語の文学作品は、現在何ひとつ残されていない。それは、1016年のプララヤ (pralaya, 大異変) によるテキストの散逸が原因なのかもしれない [Naerssen 1977: 60]。ともあれ、今日われわれが知りうる古ジャワ文学の歴史は、カディリ (Kadiri) に政治権力の中心が完全に移行した929年ごろ、すなわち東ジャワ時代とともに始まる。

古ジャワ文学史は、プルボチョロコ (Poer-

1) インド伝承のスタソーマ物語を詳しく研究した渡辺海旭は24点のテキストを資料としてあげている [Watanabe 1909: 240-241]。この24点にはスタソーマ物語としては周辺的な位置をしめるテキストも含まれている。本稿ではそのうち、人食いの調伏という中核的テーマを含まないもの、明らかに他のテキストの要約・翻訳にすぎないもの、スタソーマ物語に言及しても内容を語らないものを考察の対象から除外する。なお、漢訳文献を含めているのは、それらの原典がインドに伝承されていたという前提にたつてのことである。

2) *Sut. K* は主人公の名前から「スタソーマ」として広く知られているが、テキスト本文ではプルシャード・シャーンタが標題としてあげられている。

3) これはスカブミ碑文 (Sukabumi) として知られている。この804年の碑文は、実は、本来921年の碑文が刻まれていたところに、あとから転写されたものである [Casparis 1975: 31 note 9]。しかし、9世紀には古ジャワ語が使用されていたことは動かないであろう。

batjaraka) にしたがって古散文期・古韻文期・新期の3期にわけて理解するのが便利であろう [Poerbatjaraka 1952; 崎山 1974: 118-119]。さて、カディリ朝の前期に対応する古散文期の特色は、サンスクリット文学の散文による翻訳にある。第4代ダルマワンシャ王 (Dharmawarṇa, 991-1016年) のもとで、叙事詩マハーバーラタ (*Mahābhārata*) 全18巻のうちアーディパルワ (*Ādiparwa*, 第1の巻) など3巻が翻訳されたと伝えられている [Zoetmulder 1974: 96]。本来パルワ (parwa) という語は書物の「巻」を意味するサンスクリット parvan に由来するが、以後ジャワにおいては叙事詩に取材した散文作品をさすジャンルの名称として用いられるようになった [Ensink 1967: 1-3]。

カディリ朝は1016年のプララヤにより一時断絶するが、中興の祖アイルランガ (Airlāṅga, 1019-1045年) によって回復し、200年にわたる繁栄の時代をむかえた。古韻文期はこの時期に対応し、サンスクリット文学の韻文による翻案が盛んなことを特色とする。古ジャワ語でこの韻文詩のジャンルをカカウインと呼ぶ。これは、サンスクリット kavi (詩人) がジャワ化した kawī に、抽象名詞をつくるジャワ語の接辞をつけた派生語で、同じく kavi から派生したサンスクリットの kāvya (美文詩) と、語形成的にも意味的にも興味深い並行現象を呈している。内容的にはパルワと同じく主として叙事詩に取材して英雄の武勇談などを語り、形式的にはサンスクリットの修辞技巧と韻律規則にのっとって書かれる [ibid.: 2-3; Zoetmulder 1974: 101-102]。本格的なカカウインの始まりは、アイルランガ治世下、王を称えるために詩人カンワ (Mpu Kanwa) が書いたアルジュナウィワーハ (*Arjunawīwaha*, アルジュナの結婚) である [Zoetmulder 1974: 243-246]。これは、ジャヤバヤ王 (Jayabhaya) のもとで、1157年

に詩人パヌル (Mpu Panuluh) によって完成されたバーラタユッタ (*Bhāratayuddha*, バラタ族の戦争) とならんで [ibid.: 269], いずれもマハーバーラタにもとづいたカカウインとして、この時期を代表する文学作品である。また、アイルランガ治世以降バリ島へのジャワ文化の持続的影響が始まったこともみのがすことができない。

カディリ朝は1222年に滅び、70年間のシンガサーリ朝 (Sinhāsāri) を経たのち、1293年にウィジャヤ (Raden Wijaya) によってマジャパイト朝が創始された。この時点からイスラムの浸透がすすむ15世紀にかけてが、古ジャワ文学の新期に相当する。この時期になると、モチーフこそインド文学から借りてはいるが、ジャワ人自身の独創性が十分に発揮された創作がおこなわれるようになった。王朝の最盛期である14世紀後半、有能な宰相ガジャ・マダ (Gajah Mada) に補佐されたラージャサナガラ王 (Rājasanagara, 1350-1389年) 治世下には、宮廷詩人プラパンチャ (Prapañca) によって史詩ナーガラクリターガマ (*Nāgarakṛtāgama*, 王朝事蹟伝) が、また同じくタントゥラルによって *Sut. K* が書かれている。*Sut. K* は148章、1,210詩節からなるカカウインである。成立年代は、その内的証拠から、ナーガラクリターガマがつくられた1365年から王が死去した1389年までの間と推定されている [ibid.: 342]。なお、バリ島が文化的のみならず政治的にもヒンドゥー・ジャワ圏の重要な一員となったのも、このころであった [ibid.: 20]。

ラージャサナガラ王以後、マジャパイト朝の勢力は急速に衰退し、16世紀はじめごろにはジャワからヒンドゥー・ジャワ王国の姿は消えた。それと軌を一にして、ジャワにおける文化的状況は、ヒンドゥー・ジャワ卓越からイスラム卓越へと移行していく。ジャワ文学史においても、必ずしも画然としたもの

ではないが、15世紀ごろから中期ジャワ語期へはいったとされている [Poerbatjaraka 1952]。ところで、*Sut. Cp* が収められている物語集チャンタカパルワの成立年代は、その言語的特徴から15世紀ないし16世紀前半と推定される。⁴⁾ これは一種の百科全書的性格をもつ文献で、スタソーマ物語を含めたいくつかの物語の要約と古ジャワ語の語彙を集めた辞書的項目からなりたっている。その編纂者は不明である。言語は基本的に古ジャワ語であるが、中期ジャワ語の語彙の流入が著しくみられる [Ensink 1967: 1-13]。このような文献の出現自体、古ジャワ語期から中期ジャワ語期への文化的転換期にあって、「古典」文化の総括・継承が必要とされた社会状況の反映であろう。

ジャワにおけるイスラム化にもかかわらず、バリにおいては、バリ独自の変化を示しつつも、ヒンドゥー・ジャワ文化が受けつがれた。古ジャワ語文献は保存・転写され、スタソーマ物語を含めて多くのカカウインの物語が、今日も好んでワヤン・クリット (*wayang kulit*, 影絵芝居) の演目にとりあげられている [*ibid.*: 2-3]。実際、われわれの *Sut. K* や *Sut. Cp* の写本も、その多くがバリ島に保存されていたものである [*ibid.*: 4-6, 14; Pigeaud 1967: 188-189, 301-302; Soewito Santoso 1975: 11-14]。

この章の最後に、古ジャワ語スタソーマ物語をめぐる研究史を一瞥しておこう。*Sut. K* がはじめて学界に報告されたのは1888年オラ

ンダのケルン (H. Kern) によってであった [Kern 1888]。彼は、*Sut. K* をサンスクリット仏教説話集ジャータカマラー (*Jātaka-mālā*, *Jm* と略す) 第31話およびパーリ聖典中のチャリヤーピタカ (*Cariyāpiṭaka*) III. 12 (ジャータカ第537話を6詩節の韻文に圧縮要約したもの) と比較して、相違点を指摘している。しかし、その論旨はむしろマジャパイト時代におけるシワ=ブッダ^{シンクレティズム}混交信仰を立論することにあつたから、全148章からなる *Sut. K* のうち第1章と第139章のそれぞれ一部をあげるにとどまり、作品の全貌を明らかにするにいたらなかった。これを受けて、1895年にスペイエル (J. S. Speyer) は彼の *Jm* 英訳本の脚注においてケルン論文に言及し、*Sut. K* の存在に読者の注意を喚起している [Speyer 1895: 291]。

一方、インドにおけるスタソーマ物語に関しては、渡辺海旭が1909年に、パーリ・サンスクリット・漢訳の諸仏典から二大叙事詩・プラーナ・ヴェーダまでもを精査した研究を発表した [Watanabe 1909]。これは、同一説話に属する諸異話を、それらの先後貸借関係を確定することによって、ひとつの変遷史として再構成するという方法論の範例的な研究である。しかし、古ジャワ語スタソーマ物語への言及はそこに見出されない。このあとを追って、1912年に再びケルンが渡辺論文と同趣旨の研究を発表したが、内容的に二番煎じの感まぬがれがたく、またここでの彼の主眼は、当時の神話学の趨勢を反映して、スタソーマ物語の起源を月食=自然神話に求めることにあつたから、古ジャワ語スタソーマ物語への言及にはわずか数行がさかれたにすぎない [Kern 1912]。

このように、古ジャワ語スタソーマ物語は、その存在自体が比較的早くから知られていたにもかかわらず、内容全体についての比較・検討は長い間なされないままであつ

4) マジャパイト朝後期ないしそれ以後の成立とされている、コーラワーシュラマ (*Korawāś-rama*) というテキストがある。エンシンクによれば、チャンタカパルワにはこのテキストよりも言語的に新しい要素が多いが、しかし明らかにバリ語とわかる単語は見出されないという [Ensink 1967: 13]。言語的特徴による年代決定は推測の域を出るものではないが、とりえず15世紀ないし16世紀前半としておくのが妥当であろう。

た。⁵⁾ エンシンク (J. Ensink) が *Sut. Cp* を校訂し、序文・英訳とともに発表したのは1967年であり [Ensink 1967]、スウィット・サントソ (Soewito Santoso) が *Sut. K* の校訂本文・英訳に序文をつけて出版したのは1975年のことであった [Soewito Santoso 1975]。⁶⁾ 本稿では、これら先学の成果の上にたちつつ、古ジャワ文学側の視点から、個別的な問題点ではなく全体的な見通しをつけるという方向で論をすすめていきたい。

II *Sut. K* の梗概

①スタソーマの誕生・出家 (1・5-12・4)

ハスティナ (Hastina) に都するクル族 (Kuru) の後裔マハーケートゥ王 (Mahāketu) は、悪鬼らの跳梁に悩まされていた。悪鬼退治の希望を未来の王子に託した王の祈りに応じて、ジナ (Jina, ブッダの別名) 自身が王子として誕生する。スタソーマ (Sutasoma) と名づけられた王子は、人々の期待に反して、悟りを求めて秘かに修行の旅に出る。

②ケーシャワ尊者との出会い (12・5-16・5)

女神にスメール山 (Sumeru) で修行するようすすめられたスタソーマは、途中の庵でケーシャワ尊者 (Keśawa) に会う。尊者はスメール山まで王子に同行することになる。

③スミトラ尊者との出会い (17・1-29・5)

スタソーマは山中の庵でスミトラ尊者 (Sumitra) に会う。尊者は

(a)尊者とスタソーマとが身内であり、スタ

5) したがって、Pigeaud [1967: 188] のような基本的文献解題においてさえも記述に混乱がみられる。*Sut. K* において人食いがカルマーシャパーダ (Kalmāṣapāda, 斑足) の名で呼ばれる事実ではなく、エンシンクの校訂テキストは *Sut. K* でなく *Sut. Cp* である。

6) エンシンクは1974年に *Sut. K* の38・1から42・4までの校訂・英訳・分析を発表している [Ensink 1974]。

ソーマにダシャバーフ (Daśabāhu) とチャンドラワティー (Candrawati) という兄妹のいところがあること、

(b)ダシャバーフの神秘的な誕生の次第、現在カシ国 (Kaśi) の王として悪鬼退治に従事していること、

(c)スダシャ王 (Sudaśa) の息子が人食い (Puruṣāda) となり、悪鬼の軍隊をひきいて人々を襲うようになった経緯、

を語り、スタソーマだけが世界を救えると告げるが、王子の求道の決意はゆるがない。

④ガジャワクトラ (Gajawaktra, 象の化け物) の帰順 (29・6-33・5)

⑤蛇の帰順 (33・6-34・2)

⑥雌獅子の帰順 (34・3-42・6)

スタソーマは、旅の途中で遭遇したガジャワクトラ、蛇、雌獅子を次々と帰順させ、自身は修行のためスメール山にはいる。

⑦インドラ神の誘惑 (43・1-54・6)

スタソーマの心を修行から俗界に引きもどして人食いの調伏にむかわせようと、インドラ神 (Indra) は美しい女神に変身してスタソーマを誘惑しようとするが、失敗する。神々の意を察したスタソーマがワイローチャナ (Wairocana, 毘盧遮那仏) の姿に変じてみせると、その前に神々や聖人たちが集まり、人食いの調伏を祈願する。

⑧ダシャバーフとの出会い (54・7-57・9)

スタソーマはついに下山を決意し、折から再来したケーシャワ尊者とともに飛行して山を降りる。偶然の機会からスタソーマはダシャバーフと出会う。ケーシャワ尊者の説明でいところ同士と知ったダシャバーフは大いに喜び、スタソーマをカシ国に招き、妹のチャンドラワティーを妻として与えることを申し出る。

⑨スタソーマの結婚 (57・10-85・2)

カシ国への旅の途上、ダシャバーフは

(a)自身の結婚のいきさつ、それをきっかけ

としてコーシャ王 (Kośa) と戦さになり、勝利したこと

を語る。やがて、花嫁をむかえて盛大な婚礼がもよおされる。

⑩スタソーマの帰国 (85・3-93・3)

スタソーマはダシャバーフをつれてハスティナに帰国し、王位をつぎ、しばらくして王子アルダナ (Arddhana) を得る。ダシャバーフは守備隊長として、そこにとどまる。

⑪人食いの百王捕獲 (94・1-110・14)

そのころ、足の傷から重い病にかかっていた人食いは、傷が回復すれば100人の王を犠牲に捧げようと、カーラ神 (Kāla) に誓いをたてる。健康をとりもどした彼は、悪鬼たちに命じて首尾よく99人まで王を捕獲する。シンハラのジャヤウィクラマ王 (Jayawikrama, 実はウィシュヌ神の化身) が戦死したので生けどることができなかったが、計略によって100人めの王をとらえるのに成功する。

⑫人食いのハスティナ進撃 (111・1-120・7)

しかし、カーラ神は捧げられた百王を拒絶し、スタソーマを犠牲に捧げるよう要求する。人食いは軍勢をひきいてハスティナに進撃する。一方、自分だけが犠牲になればよいというスタソーマをおしとどめて、抗戦を主張するダシャバーフたちは反撃に出る。

⑬決戦 (121・1-137・2)

2日間の激戦の末、ルドラ神 (Rudra, シワ神の異名) の化身となった人食いのすさまじい力によって、一時は優勢だったハスティナの軍隊は壊滅する。

⑭人食いの帰順 (138・1-140・10)

ついにスタソーマ自身がルドラ神にまみえる。ルドラは彼を焼き殺そうとするが、その炎はアムリタ (amṛta, 不死の霊水) にかわって地上に降りそそぎ、戦死者たちを蘇生させる。攻撃の失敗に怒り狂ったルドラは、世界を焼きつくす却火に変身して世界を破壊し

ようとする。神々が仲裁にはいってジナ (ブッダ) とシワ (Śiva, シワ神) の本体の同一を説く。スタソーマの瞑想の力で人食いの体からルドラ神は去り、我にかえった人食いはスタソーマに和を請う。

⑮カーラ神の帰順 (140・11-147・6)

スタソーマはカーラ神のもとに赴き、自分の命と引きかえに100人の王を解放させる。カーラ神の攻撃もまたすべて無効におわり、ついにスタソーマに帰順する。

⑯結末 (147・7-147・22)

スタソーマたちはハスティナに帰還し、神々、人々、悪鬼たちもそれぞれしかるべきところへと落ちつく。その後、苦行の力によってスタソーマと王妃は天にのぼり、王位についた王子アルダナのもとで国は栄える。

III インド伝承のスタソーマ 物語と *Sut. K*

表1の左側に、インド伝承のスタソーマ物

表1 *Sut. K* とインド伝承スタソーマ
物語の比較

テ キ ス ト	A	B _I	B _I '	B _I ''
<i>Sut. K</i>	×	×	○	×
<i>J</i> 537	○	×	○	×
<i>J</i> 513	○	×	×	○
<i>Jm</i> 31	○	○	○	×
<i>Bha</i> 34	○	○	×	○
旧雑譬喻経	○	×	×	×
六度集経	○	×	○	×
雑譬喻経	○	×	○	×
僧伽羅刹所集経	○	×	×	×
大智度論	○	×	×	×
賢愚経	○	○	×	○
師子素戔婆断肉経	○	○	○	×

注) ○…該当するテーマがテキスト中に見出される。

×…該当するテーマがテキスト中に見出されない。

語を伝える11点の仏教文献を示した。これらのテキストは、その全体あるいは一部においてスタソーマによる人食いの調伏という物語を共通して語っているが、具体的な内容には著しい変化がみられる。では、インドに流布していたこれらのさまざまなスタソーマ物語と古ジャワ語スタソーマ物語、なかんずく *Sut. K* との関係はいったいどうなっているのだろうか。

この問題に関連して、エンシンクはジャータカ第537話、マハー・スタソーマ・ジャータカ（大いなるスタソーマ本生話、*Mahāsutasomajātaka*, *J 537* と略す）のテキスト中に *Sut. K* と類似する箇所がふたつあることを指摘している [Ensink 1967: 59 note 3, 61 note 30a]。これを最初の手がかりとしてとりあげてみよう。その第1は、なぜ人食いが人食いをこととするようになったかを説明する部分である [*Sut. K*: 22・6; *J 537*: 458]。いずれのテキストも、王のために料理人が用意しておいた品を犬が盗む、料理人は人間の死体から太腿の肉を切りとってきて調理して王にさし出す、という具体的な記述において、言語・文体の差をこえてきわめてよく一致している。第2は、なぜ人食いが100人の王たちをとらえようとしたのかを説明する部分である [*Sut. K*: 94・1; *J 537*: 472]。それによれば、人食いは森のなかで足に深いけがをする。彼は傷の回復を神に祈り、その代価として100人の王をとらえて犠牲に捧げることがを誓う。この記述もよい一致を示している。

さらに *J 537* との間に類似点を捜そうとするなら、上の2カ所に加えてもう1カ所あげることができると思われる。それは、人食いが100人の王を捕獲しおわって犠牲に捧げようとしたとき、神がそれを受けとることを拒否し、ただひとりの犠牲としてスタソーマを指名するという部分である [*Sut. K*: 101・1;

J 537: 475]。⁷⁾ この部分は、具体的記述において一致しているわけではないが、物語の構造上きわめて注目すべき類似点である。なぜなら、「百王捕獲」のモチーフをもつ他のテキストでは、「百王捕獲」がスタソーマの捕獲へ直接つながっていくのに対し、このふたつのテキストにおいてのみ、100人のなかのひとりではなく、100人の王全部にもまさるすぐれたひとりとしての特別な価値がスタソーマに与えられているからである。

このように、*Sut. K* と *J 537* との間には少なくとも3カ所の類似点が見出される。むろん、このような一致は、他のテキストにはみられないという前提がなりたってこそ意味をなすものであり、事実 *J 537* 以外のテキストには存在しない排他独占的な類似点である。しかし、あるテキストとの類似点だけを積み重ねても、強い関係を示す必要条件にはなるかもしれないが、十分条件にはなりえない。インド側のテキスト群を総体として対照する作業が不可欠である。そこで少しアプローチの仕方をかえてみよう。

インド伝承のスタソーマ物語が多様な異話をもつことはすでに述べたとおりであるが、これらを物語の構造の違いによって基本的な類型に分類することが可能である。⁸⁾ まず、スタソーマ物語は二重のテーマの結合からなりたっている。これらふたつのテーマを A, B と名づけておく。第1のテーマ A は、スタソーマによる人食いの調伏である。ここでは人食い側の事情はいっさい考慮されない。それは以下の3場面から構成されている。

a₁: スタソーマが人食いにさらわれる。と

7) ただし動機は異なる。*J 537* の神は、自分の意に反して100人の王が犠牲にされるのを憂い、スタソーマが彼らを救うであろうことを予想してスタソーマを指名するのだが、*Sut. K* では神自身がスタソーマを生けにえとして欲する。

8) 以下の議論は河野 [1980], Watanabe [1909] から示唆を得た。

ところが、彼はこれより以前、あるパラモンに説教の代価として報酬を与える約束をしていた。そこで、

a₂: スタソーマは必ずもどるという条件で一時的に放免してもらう。

a₃: スタソーマは言葉違わず人食いのもとにもどり、その誠実さとすぐれた感化力によって彼を調伏する。

次に、第2のテーマBは、ある王がどのようにして人食いとなったかという話である。これはテーマAとは逆に人食いの視点から語られる。このテーマは、なぜ人食いとなったかを、父親が雌獅子と交わった結果できた子だからという先天的な原因に求めるか(B_I)、後天的に何らかの原因で人食いとなったとするか(B_{II})で、ふたつに区分することができる。実際のテキストには、B_{II}のみのテキストと、B_IとB_{II}を組みあわせて潜在的素質が、ある原因で顕在化したとするテキストとがある。さらにB_{II}は、

b₁: ある王が、ある原因で人食いとなる、

b₂: 人食いは、ある危険な状態から脱するために、ある神に対して一定数の王を犠牲に捧げることが誓う、

という明確な構造をもっているもの(B_{II'})と、それ以外の不定の構造をもつもの(B_{II''})とにわけられる。b₁に関しては料理人が関与するモチーフが、b₂に関しては「百王捕獲」のモチーフが、それぞれ特徴的である。⁹⁾ B_{II'}、B_{II''}いずれの構造をもつにせよ、重要なことは、テーマBだけでは「人食いの調伏」物語にはなりえない、テーマAと結びつ

くことによってはじめてスタソーマ物語としてなりたつということである。¹⁰⁾ この点で、B_{II'}型のテキストにおいては、「百王捕獲」のモチーフが直接・間接的にスタソーマの捕獲へとつながって、ふたつのテーマを結びつける重要な役割を果たしている。

さて、以上の類型にしたがって11点のインド側テキストおよび*Sut. K*を分析したのが、表1の右側である。一見してただちにわかることは、*Sut. K*には他のスタソーマ物語と共通している要素がB_{II'}しかないということである。B_{II'}だけから構成されるスタソーマ物語がインドにおいて存在しえない以上、*Sut. K*はA+[B_I]+B_{II'}型のスタソーマ物語からB_{II'}の要素を取り入れたと判断するのが妥当であろう。逆にいえば、このB_{II'}以外の部分はインド伝承のスタソーマ物語に見出されない*Sut. K*独自の要素ということになるが、これについてはのちほど検討することにして、まずA+[B_I]+B_{II'}型のスタソーマ物語と*Sut. K*の共通部分であるB_{II'}について、より具体的な比較をしておきたい。

表2は、A+[B_I]+B_{II'}型に属する5点のインド側テキストおよび*Sut. K*から、b₁、b₂のモチーフを取り出して比較・対照したものである。前述の「犠牲の拒絶」のモチーフもb₂の展開型とみなせるから、その有無もあわせて表示しておいた。この表からただちにJ537と*Sut. K*のみが正確に一致していることがわかるであろう。先に指摘した3カ所の類似点も、この部分にはかならない。以上のことから、現在知られている資料にもとづく限り、J537と*Sut. K*の間に、ほかに

9) インド側テキストのなかで賢愚経はやや特異な位置をしめている。b₁のモチーフのあととは、典型的な「百王捕獲」のモチーフではなく、1,000人の王をとらえて宴会を開く話になる。とらわれた999人の王たちは、スタソーマなら自分たちを救ってくれるだろうと考えて、1,000人めに彼をとらえてくれば宴会がより立派になると、人食いをそそのかす。

10) 河野[1980]、Watanabe[1909]によれば、本来テーマAだけから構成された原物語が存在していたところへ、テーマBの要素が段階的に付加されていくことによって、スタソーマ物語は発展したという。

表2 B₁' の内容の比較

テキスト	人食い化の原因		「百王捕獲」の誓い			犠牲の拒絶
	犬が料理人を盗む	料理人が人肉をとる	目的	対象神	代価	
<i>Sut. K</i>	○	死体の太腿	傷の回復	カーラ神	百王	○
<i>J 537</i>	○	死体の太腿	傷の回復	樹神	百王	○
<i>Jm 31</i>	×	×	危地からの脱出	鬼神	百王子	×
六度集経	×	死体	王位の回復	樹神	百王	×
雜譬喻経	×	人間	王位の回復	山樹神	五百王	×
師子素戔婆断肉経	○	幼児	飛行能力の獲得	山神	百王	×

注) ○…該当する内容がテキスト中に見出される。

×…該当する内容がテキスト中に見出されない。

はみられない強い関連性があること、それはけっして偶然ではなく、物語の構造の対応と抜きがたく結びついていることが結論づけられる。

しかしながら、ここで先ほど留保した点にもどると、*J 537* と *Sut. K* との間に観察される類似点は、たしかに決定的ではあるが、きわめて部分的であるにすぎない。そこで、この問題について考えるために、*Sut. K* の冒頭 1・4 で作者タントゥラル自身が作品の典拠としたと称する *boddhakawya* という語の意味を検討することにしたい。この語は、サンスクリット *buddha* (ブッダ) から派生した形容詞 *bauddha* (ブッダに関する、仏教の) にサンスクリット *kāvya* (詩) が結合した、合成語 *bauddhakāvya* のジャワ化形である。この語の解釈をめぐる、ケルンとスウィット・サントソが異なった説を提出している。

まず、ケルンはこの語をある特定の文献の名称と解し、「タントゥラルが彼の詩を書くにあたって、あるモデルにしたがったことは疑いえない」と考えた [Kern 1888 : 166]。さらに、彼は別の論文で *Jm 31* とパーリ經典中のスタソーマ物語を紹介したあと、*Sut. K* における人食いの系譜が独自のもの

であることを指摘したうえで、このような創案はジャワの詩人には不可能であると断じ、ワイローチャナのような密教的要素が見出されることをも根拠として、「詩人は当然ながら北伝仏教のわれわれの知らない何かほかの出典をもっていたに違いない」と結論づけた [Kern 1912 : 145-146]。つまり、彼の考えでは、密教的要素をもったある未知の非パーリ上座部系のスタソーマ物語が先行形態として存在し、その直接的継承が *Sut. K*

なのである。これに対してスウィット・サントソは、*boddhakawya* をブッダないし仏教に関する物語一般と解した。彼によれば、*Sut. K* は、*J 537* を枠物語とし、その枠のなかにそのほかのジャータカや叙事詩からとられた諸モチーフが挿入されてできた、そして、このような構造の設定とモチーフの選択は作者タントゥラルの独創であるという [Soewito Santoso 1975 : 36-38]。¹¹⁾

筆者はふたつの理由からスウィット・サントソの説が合理的であると考えている。まず、*Sut. K* の構造は先に述べたように、現存するどのスタソーマ物語からも遠く離れており、ケルンが想定するような *Sut. K* の直接的な先行モデルを、インドにおけるスタソーマ物語の変遷史のなかに位置づけえる可能性がほとんどない。さらに、スタソーマ物語のような説話文学ではとくにそうであるが、教理的立場を示すテーマと物語自体を構成するモチ

11) 750年ないし850年ごろに建造されたとされるボロブドゥール遺跡の第1回廊欄楯上段の第116面から第119面にかけて、スタソーマ物語の浮彫りがみられる。スウィット・サントソはこれが *J 537* にもとづくかのように記述しているが [Soewito Santoso 1975 : 610]、実際はこれら一連の浮彫りは *Jm* を典拠にしており、*Sut. K* の直接的源泉とはなりえない。

ーフとは区別して考えられるべきであり、ワイローチャナの下生という大乘的テーマのもとに、非大乘文献からのモチーフが借用されてひとつの物語が構成されるということは何ら矛盾ではない。むしろ、スウィット・サントソの主張するようなジャワの詩人の独創性を認めた方がはるかに合理的だと思われる。

したがって、ここでこの章の結論として、われわれの知りうる限り J 537 が *Sut. K* の枠物語として採用されたことを認めてもよいだろう。枠物語に挿入された諸モチーフについてもインド起源の伝承との関連が認められるが [*ibid.*: 37-38]、それらの典拠については別途に考察する必要がある。¹²⁾ また、これらを含めてインド起源の伝承が、どのような形でこのジャワの詩人に伝えられたのかも未解決の問題である。古ジャワ語にパーリ語の痕跡は認められないというが [崎山 1974: 125]、実際は当時ジャワにパーリ経典が存在していたのか、サンスクリットで書かれた J 537 相当のテキストが存在したのか、あるいは口承による伝播があったのか、いずれも開かれた選択肢として残されている。さらに、このテキストが含む思想についての検討も今後の課題である。

IV *Sut. K* から *Sut. Cp* へ

Sut. K が書かれてからおよそ1世紀以上の年月を経て *Sut. Cp* が成立した。この間に物語の構造がどのように変化したかを、この章では分析してみたい。表3は、両テキストの物語構造を、比較しやすいように主要な場面ごとに区切って並置したものである。さて、これからわかるように、両者の構成はいくつかの例外を除いてきわめて緊密な一致を

示している。実際、*Sut. Cp* のテキストを読んでいくと、あたかも *Sut. K* の内容を逐一要約していったかのような印象を受ける。しかも、その要約の程度は大変にすすんでおり、多くの部分で *Sut. K* の内容をあらかじめ知らなくては文脈がたどれないほど、圧縮された表現がなされている。さらに、*Sut. Cp* には、*Sut. K* の一節をそのまま引き写したような箇所こそみあたらないが、両テキストの内容上対応する部分で同一の単語が同一の配列で用いられている例が散見される [Ensink 1967: 11-12]。したがって、エンシンクが結論づけたように、*Sut. Cp* の作成者が *Sut. K* を知っており、種本として利用したことは疑いえない [*ibid.*: 11]。この限りで *Sut. Cp* は *Sut. K* のダイジェスト版といえることができる。

それでは、両者の相違点についてはどう考えるべきであろうか。これらの点こそ、*Sut. Cp* 独自の性格を示すものとして注目されなければならない。まず、エンシンクが指摘している3項目をとりあげてみよう [*loc. cit.*]。

(1)しばしば異なった系譜を示す。

(2)ダジャバーフの結婚のエピソードの増広。

(3)登場人物の名の多くが異なっている。

第1に、ふたつのテキストはいずれも主たる登場人物の家系を詳しく述べているが、その内容に微妙な違いがみられる。なかでも注目されるのは、スタソーマの出自がコーラワ族 (Korawa) からパーンダワ族 (Pāṇḍawa) にかわっている点である。¹³⁾ この変化の結果、表3でわかるように、③(a)が②と③に分裂することになった。本来スミトラ尊者はスタソーマと同じコーラワ族の出身であるが、スタソーマの所属が移動したために、別個にそ

12) ガジャワクトラ、蛇、雌獅子の帰順 (④、⑤、⑥) の典拠に関しては、とくに Ensink [1974] を参照。

13) インド側テキストでスタソーマの出自を明記しているのは J 537 と Jm 31 だけである。いずれもコーラワ族の出自としている。

表3 Sut. K と Sut. Cp の 構 成 比 較

Sut. K	Sut. Cp
① スタソーマの誕生・出家	① 人食いの生いたち・人食い化
② ケーシャワ尊者との出会い	② スミトラ尊者の身の上
③ スミトラ尊者との出会い	③ パーンダワ族の系譜
(a) スミトラ尊者が、自分自身とスタソーマとダシャバーフの血縁を説く	④ ダシャバーフの生いたち
(b) ダシャバーフの生いたちを説く	⑤ ダシャバーフの結婚
(c) 人食いの生いたちを説く	⑥ スタソーマの誕生・出家
④ ガジャワクトラの帰順	⑦ ケーシャワ・スミトラ尊者との出会い
⑤ 蛇 の 帰 順	⑧ ガジャワクトラの帰順
⑥ 雌獅子の帰順	⑨ 蛇 の 帰 順
⑦ インドラ神の誘惑	⑩ 雌 虎 の 帰 順
⑧ ダシャバーフとの出会い	⑪ インドラ神の誘惑
⑨ スタソーマの結婚	⑫ ダシャバーフとの出会い
(a) ダシャバーフが、自分自身の結婚のいきさつを語る	⑬ スタソーマの結婚
⑩ スタソーマの帰国	⑭ スタソーマの帰国
⑪ 人食いの百王捕獲	⑮ 人食いの百王捕獲
⑫ 人食いのハスティナ進撃	⑯ 人食いのハスティナ進撃
⑬ 決 戦	⑰ 決 戦
⑭ 人食いの帰順	⑱ 人食いの帰順
⑮ カーラ神の帰順	⑲ カーラ神の帰順
⑯ 結 末	⑳ ジャヤウィクラマ王の蘇生
	㉑ 結 末

の身の上を叙述せざるをえなくなったのである。エンシンクはこの現象をワヤンの伝統に関連づけて説明している [ibid.: 60]。¹⁴⁾ 一般に、演劇では時間軸に沿った物語の叙述の配列とともに、演技者の視覚的な空間配置が重要な意味をもつ。とくにワヤン・クリットでは原則としてダラン (dalang, 人形使い) の右手側に善役、左手側に悪役が配置されるから、登場人物が善悪を象徴するいずれの陣

営に属するかはとりわけ重要な区別になる。ところで、ジャワの古典文芸に強い影響を及ぼしたインドの叙事詩マハーバーラタでは、パーンダワ族が善でありコーラワ族が悪である。したがって、もし Sut. Cp の形成がワヤンと関連していたとすれば、善なる主人公の出自をあえてパーンダワ族にあらためることは、マハーバーラタに慣れ親しんでいたジャワ人にとってきわめて自然なことであったと理解されよう。Sut. Cp とワヤンの伝統との関連については、このあとで再びとりあげたい。

第2の相違点は、表3の⑤ダシャバーフの結婚のエピソードが大変に詳しくなっていることである。Sut. K ではわずかに4詩節の量、それも登場人物の語りという形式をとっ

14) ワヤンとしては皮製人形の影絵芝居であるワヤン・クリットが一般によく知られているが、そのほかにも木製の人形を使うもの (wayang golék), 仮面をつけた人間が演じるもの (wayang topéng), あるいは絵巻物形式のもの (wayang bébér) などがある。本稿においては特定の形態のワヤンに限定することは避けたいと思う。

ているが、*Sut. Cp* ではひとつの独立したエピソードに発展している。この部分が *Sut. Cp* の作成者によって創作されたのではなく *Sut. K* 以外の伝承にもとづいて付加された、というエンシンの推測は、チャンタカパルワの性格からみても妥当だと思われる [ibid.: 18]。

第3の点については、エンシン自身そういう事実があることを指摘するにとどまっている。

さて、エンシンは *Sut. Cp* とワヤンとの関連を指摘している。そこで、この興味深い指摘の可能性をみきわめるために、重要と思われるにもかかわらずエンシンがみのがしている三つの相違点を検討してみたい。

(4) 枠物語の解体と時間軸に沿った単線化。

(5) ジャヤウィクラマ王蘇生のエピソードの付加。

(6) 教理的性格の後退と物語性への傾斜。

まず、*Sut. K* では、そのなかのいくつかのエピソードが、登場人物によって語られるという形式をとっている (表3 ③(a), (b), (c), ⑨(a))。このように、入れ子形式をとることによって物語全体が重層的になっている。ところが、これらは *Sut. Cp* においてはすべて地の文 (①, ②, ③, ④, ⑤) に書きあらためられている。ここで注意すべきことは、この新しい配列がきわめて意図的にならべられていることである。まず①で人食いの生いたちが語られ、人食いが跳梁して人々を苦しめているという物語世界の舞台設定がなされる。次に、善役側のなかの最年長者であるスミトラ尊者の身の上が②で述べられ、続いて③で善役側のなかでも主役級のスタソーマとダシャバーフ両者の共通の家系が示される。そして、年上のダシャバーフの生いたち・結婚が④, ⑤と語られたあと、年下のスタソーマの物語が始まる。つまり、*Sut. Cp* のエピソードの配列は、きわめて正確に時間の経過

に沿っているのである。枠物語を解体し時間軸に沿って単線的に展開するというこのような特色は、*Sut. Cp* が何らかの演劇的パフォーマンスと関係があったことの反映だと思われる。

次の点は、結末部分に㊦ジャヤウィクラマ王の蘇生のエピソードが追加されていることである。このシンハラ (スリランカ) の王は、100人の王たちが人食いによって次々と生けどりにされていったなかで、ただひとり勇敢にたち向かって殺されてしまった人物である。ところで、梗概⑭に述べられているように、スタソーマが人食いを調伏した段階で決戦場で倒れたすべての死者たちは生きかえるが、戦場は「インド本土」であるから、スリランカで死んだジャヤウィクラマ王はこの恩恵を受けることができないことになる。おそらく *Sut. Cp* の作成者はこの不都合に気づいて、スタソーマの願いに応じて神がこの王を蘇生させるというエピソードをあらたに挿入したものと思われる。このことは、前述の第2項目とともに、*Sut. Cp* の作成者がけっして機械的に *Sut. K* を要約していったのではないことを示している。

最後に、物語の構成上の変化をもたらすものではないが、量的な減少をもたらした、テキストの性格上の相違点にふれておかななくてはならない。まず、*Sut. K* では教理的主張が⑦と⑭において明確に表現されている。その骨子は、スタソーマがワイローチャナの権化であること、ジナ (ブッダ) の真理とシワ神の真理が根本的には同一であること、の2点である [*Sut. K*: 52・12, 139・5]¹⁵⁾ 前者

15) *Sut. K* の139章5節はインドネシア共和国の国是として知られる “Bhinneka tunggal ika” の出典である。直訳すると「それらは異なっているが、それらは同じである」となり、ブッダとシヴァ神の教えが根本的には等しいことを説くのが原義である。語句の第1要素が *bhinna* と *ika* の音声結合になっていることに注意。

は大乗仏教期におけるジャータカの変容を知
るうえで興味深く、¹⁶⁾ 後者はヒンドゥー・ジャ
ワにおけるシワ・ブッダ信仰の存在を証す
根拠のひとつとされている [Kern 1888]。さ
らに、ダシャバーフ、ジャヤウィクラマはそ
れぞれブラフマー神、ウィシュヌ神の権化に
設定されているから、シワ神の権化に対して
ワイローチャナ、ブラフマー、ウィシュヌが
対抗するという図式になるわけである [Sut.
K: 115・5]。それに対して、*Sut. Cp* ではス
タソーマと人食いがそれぞれブッダとシワ神
の権化とされているだけであり、スタソーマ
がワイローチャナの権化であることは語られ
ず、シワ＝ブッダの観念もわずかに暗示され
るにとどまっている [Sut. Cp: 50]。また、
Sut. Cp においては、このように *Sut. K* 特
有の教理的な表現が著しく弱められている一
方で、*Sut. K* にはみられない、より世俗的
な人生論的言明があらたに挿入されている
[*ibid.*: 32, 54]。

次に、タントゥラルは、インドラ神がスタ
ソーマを誘惑する場面(㉗)、海岸でむかえる
スタソーマ夫婦の初夜の場面(㉘)などで、イ
ンド文学のカーヴィヤにみられる修辞技巧
(*alamkāra*) に即した繊細な描写を延々とお
こなっているが、*Sut. Cp* はこれらの場面を
まったく無視している。*Sut. K* がカーヴィ
ヤの伝統にしたがって情景の描写を重視する
のに対し、*Sut. Cp* は行動の叙述に徹してい
るといえるだろう。

以上の論点から、*Sut. Cp* は *Sut. K* のダ

16) ジャータカは、歴史上1回だけ出現したシャカ
族のブッダの前生、すなわち修道者としての菩
薩であったときの行動を叙述する物語形式な
のだが、*Sut. K* においてはもはやブッダの前
生の話ではなくなっている。大乗期の *Sut. K*
は、複数のブッダ（たとえば毘盧遮那仏）の
同時的な遍在を前提としており、あたかもヴ
ィシュヌ神やシヴァ神が地上世界に出現（再生
・化身・憑依）するかのよう、ブッダをこの
世に下生させている。

表4 古ジャワ語と中期・現代ジャワ
語の人称代名詞の用法

	古ジャワ語	中期・現代ジャワ語
kami	1 人称 複 数	1 人称 単 数
sira	3 人称 単・複	2 人称 単・複

イジェスト版であるが単なる機械的な要約で
はなく、何らかの演劇的パフォーマンスの遂
行を目的として改編された可能性がある」と結
論づけることができよう。エンシンクはチャ
ンタカパルワがバリ島のダランたちによって
パクム（*pakēm*, ワヤン上演の際の心覚えと
して用いられる筋書）として利用されてきた
のではないかと推測している [Ensink 1967:
15]。

この点に関して興味深いことは、*Sut. Cp*
のテキストにおける人称代名詞の用法であ
る。¹⁷⁾ 表4に示したように、古ジャワ語と中
期ないし現代ジャワ語とでは、人称代名詞
kami と sira¹⁸⁾の意味がずれている。ところ
が、*Sut. Cp* において両者は、地の文では古
ジャワ語的な、セリフの部分では中期ないし
現代ジャワ語的な意味で、それぞれ用いられ
ていることが観察される。このような用法の
使いわけは、たんに中期ジャワ語的語彙の混
入というだけではすまない。古ジャワ語を享
受できたであろうテキストの「読み手」にで
はなく、語られるセリフの「聞き手」に対す
る配慮と考えられないだろうか。

ともあれ、*Sut. Cp* とワヤンとの関係につ
いてより厳密な結論を出すには、とくにバリ
島におけるワヤンの実証的調査がいまのとこ
ろ不十分であり、将来の研究をまたなければ
ならない。

17) *Sut. Cp* の一般的な言語的特徴については
Ensink [1967: 13-14] を参照。

18) ただし、kami, sira とともに現代ジャワ語の日常
語彙ではない。

おわりに

ここで本稿の結論を手短に振りかえっておこう。「スタソーマ」と呼ばれる古ジャワ語のテキストが2点現存する。1点は、14世紀の詩人タントゥラルが、J 537 の伝えるスタソーマ物語を枠組みにしてつくりあげた韻文の作品であり、他の1点は、その演劇的パフォーマンスへの応用を目的として改編された散文のダイジェスト版であり、古ジャワ語末期に編纂されたチャンタカパルワという作品に収められている。結論自体はこれだけにまとめることができるが、実際にはこれらのテキストは多くの問題をはらんだままである。

ひとつには、*Sut. K* のテキスト自体に含まれた宗教思想上の問題である。14世紀の東ジャワにおいて、なぜこれほど仏教的立場を鮮明にしたテキストが出現しえたのか。¹⁹⁾ シワ神とブッダの教えが根本的には同じであると説く態度は折衷主義を思わせる（これ自体興味深い）が、実際にはブッダの暴力ならざる威力によるシワ神に対する勝利を讃えているのである。これは、当時のマジャパイト朝の社会的文脈のなかで、あらためて考察されなければならない課題である。

もうひとつには、「テキスト」という概念そのものの問題がある。これまでとりあえずテキストという言葉を用いてきたが、現実にはこれらはいくつかの写本の総体ないし写本から帰納された理念的産物である。さらに、これらの写本（現存・散逸を問わず）も、たまたま文字として定着したテキストにすぎないのであって、物語を伝えたであろう無数の文字として定着しなかったテキストと相補うことによってはじめて、すべてのテキストの

総体を形成することになる。文字として定着しなかったテキストとは、一般的には人々の脳裏にのみ存在した物語のイメージであり、より具体的には絵画やワヤンとして表現されたテキストである。ワヤンとの関連については本稿で述べたが、広い意味でのテキスト全体を視野に入れた研究がこれから必要とされるであろう。²⁰⁾

参考文献

I 1次資料

1. 古ジャワ語文献

Sutasoma (*Sut. K*), edited by Soewito Santoso. 1975. (引用は章・節番号による)

Sutasoma (*Sut. Cp*), edited by J. Ensink. 1967. (引用は頁による)

2. パーリ文献

Mahāsutasomajātaka (J 537). Pali Text Society Edition. Jātaka No. 537. (引用は頁による)

Jayaddisajātaka (J 513). PTS Edition. Jātaka No. 513.

3. サンスクリット文献

Jātakamālā 第31話 (*Jm 31*), edited by H. Kern. 1891. Cambridge: Harvard University Press.

Bhadrakalpāvadāna 第34話 (*Bha 34*), translated by S. d'Oldenberg. 1893. *Journal of Royal Asiatic Society* 1893: 331-334.

4. 漢訳文献

旧雜譬喻經 第40話. 大正大藏經 No. 206.

六度集經 第41話. 大正 No. 152.

雜譬喻經 第8話. 大正 No. 205.

僧伽羅刹所集經. 大正 No. 194.

大智度論. 大正 No. 1509.

賢愚經 第52話. 大正 No. 202.

師子素駄婆断肉經. 大正 No. 164.

II 2次資料

1. 外国語文献

Casparis, J. G. de. 1975. *Indonesian Palaeography: A History of Writing in Indonesian from*

20) 本稿では、ローマ字・カナ表記ともに、本文においては古ジャワ語の綴り（例：シワ、ウィシュヌ）にしたがい、脚注においては適時インドネシア語あるいはサンスクリットの綴り（シヴァ、ヴィシュヌ）も用いている。なお、サンスクリットの e, o が常に長母音であることに注意。古ジャワ語のカナ表記も暫定的にこれにしたがった（例：ケーシャワ、コーラワ）。

19) インドネシアにおける仏教の歴史については岩本 [1973] を参照。

- the Beginning to c. A. D. 1500*. Leiden, Köln: E. J. Brill.
- Ensink, J. 1967. On the Old-Javanese Cantaka Parwa and its Tale on Sutasoma. *Verhandlingen* 54. The Hague: Martinus Nijhoff.
- . 1974. Sutasoma's Teaching to Gajavaktra, the Snake and the Tigress. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 130: 195-226.
- Kern, H. 1888. Over de Vermenging van Çivalisme en Buddhisme op Java, naar Aanleiding van het Oudjavaansch Gedicht Sutasoma. *Verslagen en Mededeelingen der Koninklijke Akademie van Wetenschappen* 3(5). Reprinted in *Verspreide Geschriften* 4: 149-177. (引用は VG 版による)
- . 1912. Kalmāṣapāda en Sutasoma. *VMKAW* 4(11). Reprinted in *VG* 3: 123-151. (引用は VG 版による)
- Naerssen, F. H. van. 1977. *The Economic and Administrative History of Early Indonesia*. Leiden, Köln: E. J. Brill.
- Pigeaud, Th. G. Th. 1967. *Literature of Java*. Vol. 1. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Poerbatjaraka, R. M. Ng. 1952. *Kepustakaan Djawa*. Jakarta: Djambatan.
- Soewito Santoso. 1975. *Sutasoma: A Study in Javanese Wajrayana*. New Delhi: International Academy of Indian Culture.
- Speyer, J. S. 1895. *The Jātakamālā*. London: Oxford University Press.
- Watanabe, K. 1909. The Story of Kalmāṣapāda and Its Evolution in Indian Literature. *Journal of Pali Text Society* 1909: 236-310.
- Zoetmulder, P. J. 1974. *Kalangwan: A Survey of Old Javanese Literature*. The Hague: Martinus Nijhoff.
2. 日本語文献
- 岩本 裕. 1973. 「インドネシアの仏教」『アジア仏教史インド編Ⅵ 東南アジアの仏教』岩本 裕 (編), 259-309ページ所収. 東京: 佼成出版社.
- 河野智子. 1980. 「スタソーマ王本生について」(未公表)
- 崎山 理. 1974. 『南島語研究の諸問題』東京: 弘文堂.